

団塊65歳

新巨大市場

5

「料理がおいしくてシェフもすてき」。外食大手のワタミが昨年9月に相模原市中央区にオープンした高齢者向けのデイケアセンター「ハッピーデイズ」。近所から通う逸見ふみ代さん(69)は、「シェフ特製豆腐レー」に舌鼓を打ち、笑った。

食堂は高級レストランの雰囲気漂う。フランス料理のシェフが腕ふるうラUNCHは、前菜3種とデザートもついたフルコース。ワタミは平成16年に介護事業に参入。デイケアセンターのほか、介護付き有料

老人ホームや高齢者向け食事宅配サービスを手がける。平成22年度のグループ売上高のうち介護関連事業が占める割合は30%を突破した。

介護、住宅、葬儀…不安に応える



ワタミが運営するデイケアセンターの食堂は、高級レストランのような雰囲気。—相模原市

老後への不安に応えるビジネスも急成長している。

昨年10月に制度が始まった「サービス付き高齢者向け住宅(サ高住)」には新規参入が相次ぐ。緊急時に常駐の管理員を呼び出せるなど生活支援サービスを提議する賃貸住宅で、補助金や税制などの優遇措置が設けられている。積水ハウスは東京都北区の旧古河庭園近くに同住宅62戸を建設。約35平方メートルの1Kの場合、家賃が月13万円、管理費約1万2千円、生活支援サービス費1人2万1千円の料

金設定だ。

死への準備を、元気なうちにしておきたいというニーズも大きい。

葬儀業界最大の公益社を傘下に置く燦ホールディングス(HD)は、市民グループの会合や老人ホームなどで「生前準備」についてのセミナーを開催。公益社には、遺族からの法事などに関する相談に乗るサポート体制がある。燦HDの古内耕太郎社長(48)は「残された人の心のケアも大事だ」と話す。

ネスチャンスが生まれる一方、現役世代には重い負担のしかかり、社会保障制度は限界にきている。

65歳以上の高齢者1人を支える15〜64歳の現役世代は、昭和35年の11・2人から平成22年は2・8人にまで減った。超高齢化社会をどう乗り越えるのか。第一生命経済研究所の熊野英生・首席エコノミストは、新たな巨大市場による経済の好循環に希望を託す。「100兆円といわれる高齢者の消費が企業を潤せば、現役世代の所得が増え、その消費も活発化する。現役世代が十分な保険料を支えるようになれば、社会保障制度も強固になる」

団塊の世代が完全リタイアの「適齢期」となる65歳を迎え、新たな需要とビジ

(団塊65歳取材班) おわり